W・E・B・デュボイス『黒人の魂―エッセイとスケッチ』(1903 年)

――その現代的意義を索めて（第 11 章から追想）――

古川哲史(大谷大学)

はじめに

本稿は、19 世紀末から 20 世紀半ばにかけて世界の黒人解放運動、パン・アフリカ運動、さらにはハーレム・ルネサンスなど文化運動にも多大な影響を与えたアメリカ黒人（アフリカ系アメリカ人）ウィリアム・エドワード・バーガート・デュボイス（William Edward Burghardt Du Bois: 1868-1963）の代表作と言われる『黒人の魂――エッセイとスケッチ』(W. E. B. Du Bois., *The Souls of Black Folk: Essays and Sketches,* Chicago: A. C. McClurg, 1903）を取り上げ、現代的視座からその書の意義を論じるものである [1)]。前々稿（本誌 23 号、2018 年）および前稿(25 号、2020 年）[2)] では、『黒人の魂――エッセイとスケッチ』(以下、『黒人の魂』と表記）の序想から第 10 章までを扱った。本稿では、第 11 章から追想までを論じ、全体のまとめを提示する [3)]。第 11 章から追想までは本書のための書下ろしである [4)]。

なお、日本における『黒人の魂』の訳業やデュボイス論は、日本におけるデュボイス紹介／研究概観として書誌学的な見地から簡潔にまとめた拙稿がある [5)]。

『黒人の魂』(第 11 章から追想)

第 11 章：最初に生まれたものの死去

第 11 章は、最初の息子の誕生と死を扱っている。デュボイスは章の冒頭で共和主義を信奉したイギリスの詩人チャールズ・スウィンバーンの『イティラス』からの詩の一部を引用している。その下に黒人霊歌「我が母がそこにいることを」(I Hope My Mother Will Be There）からの短い楽譜を添えている。

本章は、「子どもがお生まれになりました」という言葉から始まる。そして、子どもがどんな風で、どんな眼で、髪がどんなに縮れているだろうかなどと思いながら、デュボイスは妻と子どものもとに急ぐのである。妻とは 1896 年、ウィルバーフォースの大学生であったときにデュボイスと結婚したニナ・ゴマー・デュボイス（Nina Gomer Du Bois）のことである。そしてデュボイスは息子がヴェールの内側（Within the Veil）で生まれたことを痛感する。デュボイスは次のように語る。

そこ、ヴェールの内側で、彼は生きることだろう、――ひとりの黒人として、ひとりの黒人の息子として。あの小さな頭のなかに――ああ悲痛な気持で――迫害される種族の屈しない

矜持を保持しながら。あの小さな窪みのある手で、――ああ、物憂げに！――望みなきにあらずとはいえ、およそ有望とはいえない希望にとりすがりながら[6]。

そして、「わたしは、わが子のうえをよぎるヴェールの影を見た」と言うのである。

デュボイスは新たな家族とともに、3 人で南部アトランタの家で、つつましくも幸せな時間を得ていた。しかし、そんな時も長くは続かなかった。子どもが重い病気になったのである。「死の影」が子どもを襲い、息子は 3 歳で亡くなってしまい、打ちひしがれた父と母だけが残される。

カラー・ラインというものを知らなかった可哀想なわが子よ、――ヴェールは、たとえ彼の心を翳らせたとはいえ、彼の太陽の半分をも曇らせることはなかった。彼は白人の婦人を愛した。彼は黒人の育児婦を愛した。そして、彼の小さな世界にあっては、皮膚の色が問題でない。赤裸な魂だけが行き来した。わたしは、――そう、すべての人々は、――無限の広がりをもつあの小さなひとつの生命によって、いっそう大らかで、いっそう純粋になるのだ[7]。

デュボイスは「黒人の息子」とさえならなかった子どもについて、自らを慰め納得させるために、このように言うしかなかったであろう。皮膚の色が問題とならない純粋な世界に魂を生きたのである。

その後、野辺の見送る日には、街を通るデュボイスたちは白人たちから「黒んぼどもだ！」と声を浴びせられ、デュボイスはますますジョージアの赤土に埋葬することに抵抗感を覚える。そして、「わたしの魂は、たえず、わたしにこう囁きかけるのだ『死んだのではない。死んだのではなくて、逃げたのだ。囚われの身ではなくて、自由なのだ』」と内面の感情を吐露する[8]。しかし、やがてそうした考えが無益と思われ、やはり生きながらえていれば、若い世代においては、差別の重荷がもっと軽いものになってかもしれないと考えるようになる。デュボイスは次のように述べる。

きっと、そのうちに、あの力強い朝が訪れ、ヴェールを取りはらい、囚われの人々を自由にするだろう。わたしのためにではなくて――わたしは縛られたままこの世を終えるだろう――夜を知らず朝に向かって目ざめた清新な若い魂たちのために。人々が働くものに向かって、「彼は白人かね？」と尋ねるのではなくて、「彼は働けるかね？」と尋ねる朝のおとずれ。芸術家たちに向って、「彼は黒人かね？」と尋ねるのではなくて、「彼らは知っているかね」と尋ねる朝の。何年も何年も先のことだろうが、ある朝、このようなことが起るだろう[9]。

デュボイスのこの言葉は、当時の黒人たち、読み書きを知らない者たちもを含めての、強い思いでもあった。とりわけ、子どもや孫を持つような黒人たちには実感できる言葉であった。

本章の主題は、デュボイスの息子の死にまつわるゆえ、後の書下ろし原稿とはいえ、やや

感傷的な言葉が結語まで続く。自らの息子に対し「それでは、眠(やす)むがいい、わが子よ、――わたしが眠り、赤んぼの声とやむことのないその小さな足音に、目をさますそのときまで眠(やす)むがいい――ヴェールを超えて」[10] と章の締めくくっている。ここでも、本書のキーワードである、カラー・ラインによってつくられたヴェールへの嘆き、ヴェールのない世界への願いが溢れていると言える。

第 12 章：アレクサンダー・クラムメル

第 12 章は、1819 年生まれのアフリカ系アメリカ人の聖職者かつアボリッショニストで、イギリスで学び、西アフリカのリベリアで伝道師となり、後年アメリカに戻り首都ワシントンＤＣで牧師となったアレクサンダー・クラムメル（Alexander Crummell: 1819-1898）について論じる。章の冒頭でイギリスのビクトリア朝の詩人テニスンの『アーサーの死去』から一部を引用している。その下に今もよく知られる黒人霊歌「スイングロウ・スウィートチャリオット」(Swing Low, Sweet Chariot) からの短い楽譜を添えている。

デュボイスは「つぎにお話しするのは、ひとりの人間の心の歴史である」とはじめ、アレクサンダー・クラムメルが幼少期に 3 つの誘惑に出会ったと述べる。それらは「赤い夜明けに執拗に逆らう憎悪の誘惑。真昼の日を暗くする絶望の誘惑。いつも薄明とともに広がる疑惑の誘惑」[11] であり、「とりわけ、みなさんには、彼が越えてきたもろもろの谷間、――屈辱の谷間と死の影の谷間について聞いてもらわなければならない」[12] と語り始める。

デュボイスが直接にクラムメルと出会ったのは、デュボイスが初めて正式に教鞭をとったウィルバーフォース大学の会議においてであった。デュボイスは彼より 60 年余りも年長のクラムメルに、丁重に頭を下げ話しかけている。ディボイスはヴェールの内側の世界を生きてきたクラムメルとその時代について、次のように言う。

> 彼は、ミズーリ協定と時を同じくして生まれ、……つまり、生きるには騒がしい時世であり、回顧するには暗く、待望するにはなおいっそう暗い時世であった。70 年前、自分の浮沈のおおい人生に意味について立ち止まって考えたこの黒い顔をした若者が、世界を見下ろしたとき目に映ったものは、とほうにくれるような展望(ながめ)であった。奴隷船は、その時もなお呻吟しながら「大西洋」［訳書は「太平洋」と誤訳している］を横断し、かすかな叫び声は、南部の微風にながれこみ身体の大きな黒人のおやじは、若いものたちの耳に狂気じみたさまざまな残酷物語を囁いた。低い戸口から、母親は無言で遊んでいる自分の子供を見守り、日暮れになると、暗闇がその子を奴隷たちの国へと連れ去ることのないように、しきりに彼を捜し求めた。[13]

クラムメルの時代のアフリカ系アメリカ人とアフリカ人について、簡潔に活写している文章でもある。

デュボイスはクランメルが成長するにつれて、奴隷制や人種にとらわれた世界を愛さなくなった、いや憎しみの誘惑が入り込んできたというのである。「19 世紀は、人間的共感の最初の

世紀」であったはずが、「われわれみんなが、絶望的にそれらの他人の世界をのぞきこみ、そしてこういって嘆いたのである。『おお、世界のなかの世界よ、人間はどのようにして、おまえたちをひとつにすればよいのだろうか？』」[14] との嘆きとなる。

やがてクランメルは、牧師となるよう啓示を受ける。しかし、監督教会の総合神学校は黒人が聖職者につくのを認めなかった。白人聖職者たちは、親切に、なかば物悲しげに彼の両肩に手を置いて、「――つまり、――そう――時期尚早ということですね。いつか、わたしたちは信じます――真面目に信じます――こういった差別がすべて解消してしまうだろうことを。だが、いまは、世界はごらんのとおりなのです」[15] と述べる。これが、デュボイスにとって、絶望の誘惑となるのであった。そしてクランメルはその誘惑と闘うのである。そして、1842 年、ニューイングランドで自分自身の礼拝堂に教会の牧師として立つことになる。この若い牧師は骨折って働き、自分のおこなう説教を入念に書いた。それにもかかわらず、彼に与えられた教区に黒人が少ないこともあり、教会に来る会衆の数は減っていき、「そして日増しに、第三の誘惑が、いっそうはっきりと腰を落ちつけ、そして、なおいっそう明確に、ヴェールの内側に居を占めたのである。」[16] デュボイスは述べる。

> 「おお、黒人たちかね？そうだ。」あるいは、おそらくもっとはっきりと、「おまえは何を期待するんかね？」声と挙動には、疑惑があった――疑惑の誘惑が。どんなに彼は、それを憎み、かつ、それに猛烈に噛みついたことだろう！「もちろん、彼らにはできるのだ」と彼は叫んだ。「もちろん、彼らは、学び、努力し、成しとげることができるのだ――」と。「もちろん」と、その誘惑は、穏やかにつけ加えてくるのだった。「彼らは、そのようなことは何もできはしないよ。」三つの誘惑のすべてのうちで、この誘惑は、最も深くこたえるものだった。[17]

クランメルは自らの教区での活動の失敗を認めざるを得なかった。その後、彼はニューヨークの教会で働いたのち、イギリスにわたる。イギリスではケンブリッジ大学に通う機会を得て、学位を得る。その後、「彼は、アフリカに向かっていった。そして、長い年月のあいだ、奴隷商人の徒輩のあいだにあって、彼は、新しい天と新しい地をもとめた」のである。[18]

そしてクランメルはアメリカに戻ってくる。「憎しみの誘惑を脱し、絶望の炎に焼かれ、疑惑に打ち勝ち、屈辱に抗しうるよう犠牲によって鋼と鍛えられ、彼は、ついに海を渡って故国に向かった」のである。そして不屈の正義をもって、同胞のために働くのである。デュボイスは、「こうして彼は成長した。そして、ヴェールの内側を歩く人々の最良のものたち全部に、彼はその広範な影響を与えたのである」と述べ、さらには、「彼を知ることのほとんどないこの世界は、どれほど多くの損失を蒙っているのか」と当時のクランメルの知名度の低さを嘆き、彼の再評価も述べている。デュボイスにとって、クランメルは「自己の仕事を成し遂げた、――彼は、それを気高く、みごとにやりとげた」人物であった[19]。一方でクラムメルは、アフリカ植民地協会とも関係があり、アフリカ系アメリカ人をアメリカから分離するものだと、デュボイスの先達かつ敬愛するフレデリック・ダグラスなどからの批判を受けていた人物でもあった。とはいえ、奴隷制廃止後に国際的に活躍する世代のデュボイスにとっては、文字通り、環大西洋を跨いだクラムメルの活躍は、より称賛に値するものであった。

第 13 章：ジョーンの帰還

第 13 章は、ジョーンという名を持つ黒人と白人についての短編小説である。章の冒頭では、第 9 章でも引用されたイギリスのビクトリア朝の詩人エリザベス・ブラウニングの、『ガンジス河のロマンス』から一部を引用している。その下には黒人霊歌「東方に埋めたまえ」（You May Bury Me in the East）からの短い楽譜を添えている。

ジョーンはジョージア州の南東部アルタマハの出身で、ジョーンズタウンにある「黒人大学」のウエルズ大学に学んでいる。アルタマハの白人たちの間では、ジョーンは善良な礼儀正しい少年であった。しかし、母親がジョーンを学校に入れようとすると、白人たちはみな頭を振るのであった。「学校は、あの子を駄目にしてしまうな――台なしにしてしまうだろうな」と言うのである。ここにすでに、小説の結末が暗示されているかのようである。一方、黒人たちはジョーンを乗せた列車を誇らしげに見送りつつ、次のように思案する。

> その朝、アルタマハに残って、汽車が騒々しい音をたてながら遊び仲間で兄弟で息子であるものを世界の方へと運び去るものを見ていたものたちは、その後、一つの言葉――「ジョーンが帰ってくるときは」――を、絶えず心にうかべるのだった。さあ、そのときは、どんなパーティが開かれるだろうか、また教会ではどんな話が聞かれるだろうか。どんな新しい家具が居間に――おそらく居間も新しいものだろうが、備えられるだろうか、そしてジョーンを先生にして、新しい学校が開かれるだろう[20]。

黒人たちの教育を通した社会的上昇とその渇望が、デュボイスの筆により、小説のタイトルと重ね合わせた形で見事に描かれている。

黒人のジョーンに続いて登場するのが、もう一人の、ジョーンである。地元の名士である判事の息子、プリンストンで学ぶ白人であった。しかしながら、「遠く離れた南部の村では、人々は、なかば意識的に、ふたりの若者の帰ってくるのを待ち望んでいた」が、「黒人たちは、ひとりのジョーンのことを考えていて、そのジョーンは黒かった。また、白人たちは、いまひとりのジョーンのことを考えていて、そのジョーンは白かった。どちらの世界も、相手の世界がどんなことを考えているのか思ってもみなかった」[21] と、白人と黒人の間のヴェールの存在を指摘しつつ、やがてそれが悲劇的な「交差」、結論を生むことも示唆されているとさえ読みとれる。

ジョーンズタウンでは、黒人のジョーンの成績や遅刻を含めた素行は思わしくなかった。停学までが議論されたのである。その一方で、ジョーンは初めて「少年の日々には気づくことなしに過ぎてしまったか、でなければ笑って応対してきたところの拘束とか軽蔑に」気づくことになる。自身と白人の間のヴェールの存在に気づき、「自分と自分の同胞をとり囲んでいるカラー・ラインに苛立ったのである。「彼の話には、一抹の皮肉が、そして彼の生活には、ある定かでない漠とした憤りが、忍びこんだ」[22] という指摘は簡潔かつ重要である。

次の場面では、黒人のジョーンはニューヨークにいる。西洋音楽のコンサートホールで、かつての遊び仲間で白人のジョーンと偶然に出会う。そしてそのホールでの退席を求められたことから、「わたしには、はっきりしたアルタマハの義務があるのだ。おそらく、そこでは、みんなわたしが黒人問題の解決に手をさしのべるのを許すだろう」との思いに至り、アルタマハへと 7 年ぶりに変えることを決心する[23]。

ジョーンがアルタマハへ帰還すると、駅では黒人たちの群衆が「無言の冷淡な男」へと変貌

を遂げたことに戸惑いつつも歓迎した。しかし、デュボイスは、群衆の端の白人の郵便局長に、「北部へ行ってきやがったんだ、で馬鹿な考えをまったくいっぱい仕込んできたのさ。だが、言っておくがね、そんなのはアルタマハでは通用しないさ」と呟かせている。地元の黒人バプティスト教会では歓迎会が開催された。そこで彼は次のように語る。

> 時代は、と彼は言った、新しい思想を要求している、と。われわれは人間の同胞関係と運命とについて、以前よりいっそう広い観念をもっており、17 世紀や 18 世紀の人間たちとは、はるかに異なってきている。つぎに彼は、慈善と普通教育が、とくに富と仕事の普及が発生したことについて、語った。かくして問題は、と彼は低い色の褪せた天井を見つめながら、思いぶかげにつけたした。この国の黒人が、新たな世紀の努力にさいして、どのような役割を担うであろうかということである、と。彼は、松林のあいだに立ちあらわれるであろうところの新しい産業学校のことについて、まだ明確ではないが、その輪郭を描いてみせた。彼は、組織されるであろうことの慈善的で博愛的な事業について、銀行や事業のために蓄えられるであろう資金について、事細かに語った。さいごに、彼は団結を力説し、とくに宗教上および宗派上のいさかいを起こすことのないように、と懇願した[24]。

しかしながら彼の熱意とは裏腹に、彼の言葉に耳を傾ける黒人たちの共感は得られなかった。デュボイスは、ジョーンの妹に、「多くのことを究めたり、学んだりするってことは、だれもかれも、人を――不倖せにするものなの？」[25] とその戸惑いを言わせている。その後、ジョーンは、白人の判事の家に出向き、黒人学校で教える許可を求める。判事はあからさまな黒人差別の感情を表にしつつ、しばらく状況を見ることにする。

その白人判事の息子のもう一人のジョーンが帰宅したのが、黒人学校が開設されたひと月後のことであった。しかし、白人のジョーンの方は、判事の父の望み――アルタマハの市長や下院議員に、ジョージア州の知事になることなど気にせず、ニューヨークでの生活の方に目を向けていた。「あなたはまさか、わたしみたいな若いものが、永久にこの――ぬかるみと黒人たち以外には何もない、この神に忘れられた街に定住するようにと望んでいるわけではないでしょうね？」という息子の言葉に対して、判事は「わたしはそう望んでいる」と応える[26]。南部と北部の地域差に加えて、都会へと若者が引き付けられる時代の変容も窺える。息子の件でも思い通りにならない判事は、その怒りの矛先を黒人学校に向け、学校の閉鎖を命じる。

一方、白人のジョーンは黒人のジョーンの妹であるジェニーの姿を認め、その容姿に引き付けられる。腕をつかまれた彼女は驚きすり抜けるが、白人のジョーンは高い松林を抜けて彼女を追いかけてくる。その際に、学校をやめさせられた黒人のジョーンが、白人のジョーンが妹に乱暴する場面に遭遇する。北部へ再度向かおうとした黒人のジョーンは、そこで白人のジョーンを殴打し、殺してしまう。この物語は「薄暗い朝の黎明にうかぶ樹々のあいだに、彼は彼らの影が踊っているのを見まもり、彼らの馬が、自分のほうに向かって大地を轟かせながらやって来るのを聞いた。……そして、あのぐるぐると輪になっている撚りあわしたロープを彼がもってきているのかしら、と思った」[27] という、黒人ジェーンの「捕獲」と「リンチ」をイメージさせる描写で幕を閉じる。

黒人と白人の二人の「ジェーン」の故郷への帰還と言うタイトルにふさわしい短編となっている。

第 14 章：哀しみの歌

第 14 章は、本書のまとめともいえる章であり、章の冒頭は西洋の詩ではなく、黒人霊歌のみから一部を引用している。「哀しみの歌」（Sorrow Songs）である。デュボイスにとっては、「わたしに向けて朝、昼、晩と、わたしの兄弟や姉妹の声にあふれ、過去の声にみちた、おどろくべきメロディーの流れがほとばしりはじめ」る歌であった。デュボイスは言う。

> アメリカは、神からその国土のうえに印しづけられた荒々しい壮大さ以外には、世界にほとんど美なるものをあたえなかった。この新世界においては、人間精神は美によりもむしろ力と巧妙さに発現したのである。そこで運命的な偶然によって黒人民謡――リズムを持ったこの奴隷の叫び――が現在たんに唯一のアメリカ音楽としてのみならず、同時に、大洋のこちら側のこの地に生まれた人間の体験のもっとも美しい表現として存在しているのである。それは無視されてきたし、なかば軽蔑されてきたし、いまもそうである。そしてなによりも頑強に考えちがいされ、誤解されてきた。けれどもそれにもかかわらず、いまなおやはりそれは国民の非凡な精神的遺産としてまた黒人人民の最大の才能として存在するのである[28]。

デュボイスの言う奴隷の歌は、長らく無視され続けてきたが、もはや完全に忘れ去られることがないことに貢献したのが、テネシー州ナッシュビルに設立された初めての「黒人大学」フィスク大学のフィスク・ジュビリー・シンガーズであった。とりわけ、1871 年からの北部への大学設立資金獲得のための「巡礼の旅」は、黒人霊歌の真価を広めることとなった。やがてニューヨークから、イギリス、ドイツ、などヨーロッパも含め 7 年間にわたり彼らは歌うのである。あまり知られていないが、フィスク・ジュビリー・シンガーズは米国への帰路、日本にも立ち寄り、神戸女学院などで講演会を開いている[29]。

ついでデュボイスは、黒人霊歌の種類をいくつか説明していく。まずは原始的なアフリカ的音楽である。次は「誰ひとりわがなやみを知らず」に代表される奴隷を起源に持つ歌である。「スゥング・ロー・スウィート・チャリオット」でも馴染みのある「死の子守歌」と言えるものもある。これらの霊歌は奴隷が「世界に語りかけた」ものであった。そして、いくつかの歌を楽譜や聖書の説明を交えながら紹介している。デュボイスは語る。

> 《哀しみの歌》のあらゆる哀しみを通じて、ひとつの希望が息づいている。――それは物事の窮極の正義によせる信念である。絶望にみちた短調の抑揚は、しばしば勝利としずかな安心に変る。ときとしてそれは生によせる信念であり、ときとして死によせる信念であり、またときとしてかなたのどこか美しい世界での無限の正義によせる確信である。しかしそのどれに当たるにせよ、意味するところは明白である。すなわち、いつの日にか、どこかしらで、人々は彼らの皮膚によってでなく、彼らの魂によって人間を判断するであろうということである[30]。

この最後の表現などは、キング牧師の有名な演説「私には夢がある」（1963 年）をはるかに先取りしていたとさえいえよう。

デュボイスは本章の最後に、「アメリカはそのヴェールをとりさり、囚われの人々は自由になることであろう」と述べる。わたしの小さな子どもたちは陽光にむかって歌っている、

として次ぎの歌詞を紹介する

ぼくらは疲れた旅人をはげまそう、
疲れた旅人をはげまそう、
ぼくらは疲れた旅人をはげまそう、
天国への道をゆく疲れた旅人をはげまそう[31]。

すると、疲れた旅人は帯を締めなおし、顔を朝日の方に向け、前に向いて自身の道を歩んでいくのであった。デュボイスにとっては、「哀しみの歌」は「生きる歌」「生き延びる歌」ともなるのであった。

追　想

本書の最後を締めくくる追想は、初版ではわずか数行である。The After-Thought の見出しで始まり、 ピリオドのない文章に続く THE END の表記で終わる。見出しも含めてすべてイタリック体で強調あるいは異なる形式として書かれている、本書の唯一の部分である。

追想は、「わたしの叫びを聞け、おお、神なる読者よ、どうか、この私の書物が、世界の荒野に死産することのないようにして下さらんことを」から始まり、「優しい人よ、この書物のもろもろのページから、すばらしい収穫を刈りとる、思想の活力と思慮深い行為が湧き出るように」と続く。デュボイスが本書を白人黒人を問わず、できるだけ広く読者層に訴えたいという思いは、その次の文章により具体的に表れている。「罪ある人々の耳をば真理でうずかせ、人間の兄弟愛が嘲笑の的と陥し罠になっているこの荒涼とした時代に、諸国民を意気盛んにする正しさをもとめて 7000 万人が憧れるように」と言うのである。そして、「そうして、あなたの力で時をたがえず、無限の理性がもつれを正常にし、今あなたのつけたもろいページを折り曲げたしるしが、じっさい、それっきりこうなってしまわないように」と締めくくっている[32]。

この追想は、第 14 章がすべて章をまとめる役割を果たしたのを受けて、本書全体を一括りにする。ときに難解な修辞に走りがちなデュボイスが、自らの素直なメッセージを、平易、しかし力強い言葉で読者に届けようとしていると言える。

おわりに

本論では、あえて『黒人の魂』を章の掲載順に、テキストの解説風に論じてきた。それは一見ばらばらに見える本書の各章が、ディボイスが異なる雑誌で公刊した原稿に、書下ろし原稿を加えてまとめて一書にしたその構成を尊重したからでもある。本書では、各章のエピグラフに白人などの詩と黒人霊歌を対置させているのも、それらが文化的、精神的に等価ということを示していよう。（その点では、本文で詩を並列させておらず、さらには白人などの詩のみ説明を注で付しているだけの訳書はやや不適切であろう。）そうした独立した内容の各章を、最終章の黒人霊歌論で包み込むように纏めている。それゆえ、最終章の章題がヴェールの内側で唄われてきた「哀しみの歌」（Sorrow Songs）であり、本書全体のタイトルが『黒人の魂――エッセ

イとスケッチ』（*The Souls of Black Folk: Essays and Sketches*）となっている。「魂」は「霊」でもあり、当時一般に使われていた Negro ではなく Black を前面に出したタイトルは「天才的」だとさえ言われた[33]。また、副題の「エッセイやスケッチ」は、本書を学術的な本ではなく、広く一般読者層に解き放なたれた書物としたのであろう。（近年、副題を省いている本も多いが、不適切であろう。なお、本書は 1903 年から 1940 年に間に 24 版［刷］され、1935 年までの時点で 15000 部売れたとされる。その点は短い追想にもうかがえる[34]。そして、「エッセイとスケッチ」と名付けられた学術的体裁でない本書が、刊行後 100 年以上たってもなお、大学で必読教科書として扱われていることにも、本書の意義や高い評価が窺えよう。）

黒人作家で活動家であったジェームズ・ウェルドン・ジョンソンは、『黒人の魂』の与えた影響力を、ストウの『アンクルトムの小屋』と同じくらいと比較している。一方で、『黒人の魂』は出版当時、ブッカー・T・ワシントンへの批判の章を入れたことで、ワシントン派の人々から批判を受けることになった。当時は、黒人解放運動の方向性がワシントン派とデュボイス派に分かれていた。しかしながら、デュボイスは後年、ワシントンを批判したことを後悔している。筆者も本論文・第１部で言及したように、両者とも「アメリカ合衆国で黒人であることの意味を求め、マイノリティ集団としての黒人社会全体の底上げ、向上を願い、行動した。その過程には、マイノリティ集団もマジョリティ集団と同じく、その内部に多様な階層が生まれ、立場や方法の異なる社会的指導者が生まれるのは必然であろう」と思われる。よく言われる二人の対立は、二人の支持者の間の対立であり、ワシントンとデュボイス間に生じたものではないとさえ言われる。

デュボイスの有名な「才能ある十分の一」理論も、私的には、残り十分の九はワシントン流の方針に任せたとも考えられる。実際、ワシントン死去の際、デュボイスが書いた追悼文には、「ワシントン氏の死は、アメリカ史において一つの重要な出来事と記されるものである。ワシントンは、フレデリック・ダグラス以降のもっともすぐれた黒人指導者であった」とある。現在の視座から見ると、公民権運動期のマーティン・ルーサー・キング牧師とマルコム・X が、徐々に距離を縮めつつあった動きとの、重なりを見ることができるかもしれない。（後者はマルコム・X の暗殺死で実現しなかったが。）

『黒人の魂』は、多くの国でも翻訳刊行されている。日本語にも 1963 年に初訳出版され、文庫版が 1992 年に出されている。近年は「デュボイスとアジア」のテーマが Trans-Pacific や Black Pacific などの視点とともに注目され、関連書や論考も刊行されている。大部な『黒人たちの再建』（1935）にも繋がる『黒人の魂』を代表作とするデュボイスの活動と著作や発言は多彩な諸相を含み、それゆえデユボイスに関する議論や分析も様々な範囲で行われてきた。学術的な分野でも、歴史学、社会学、文学など多岐にわたる。第１部の論文でも部分的に紹介したように、それらの多大蓄積を承知で、現代のアフリカ系アメリカ知識人の代表的な一人コーネル・ウエストは、デュボイスあるいはデュボイス研究の現代的意義を次のように述べている。

> わたしたちはW・E・B・デュボイスの物事を扱う許容量の大きさや視野の広さ、深さを十分に把握できるところにまだ達していないのかもしれません。デュボイスは学者、公の場で活躍した知識人、活動家であり、資本主義や階級制度を鋭く批評し、またその階級制度が白人優越主義や人種差別制度と密接に関連していることを見通していました。それゆえに、わたしたちは自分たちの理解、とくにポスト・アメリカの世界、つまりアメリカ帝国がもはや中心にない世界についての理解を深めるのに、デュボイスがどれほど参考になるかをよう

やく実感し始めたと思っています[35)]。

アメリカでは 2017 年に、内向きな政策と虚勢で、内向きな人びとに支持されたトランプ政権が誕生したように、かつてのアメリカ帝国の勢いはなく、没落の始まりを感じさえさせる。それはまた、思想家・評論家の浅田彰が言う、「『自分たちは米国の主役だ』と思ってきた白人男性たちがグローバルＩＴ資本主義下で落ちこぼれそうになり、アフリカ系の人々や女性などが活躍する状況に憎しみを抱いた。つまり、古いアイデンティティーに執着する人々の問題」（朝日、2022 年 2 月 9 日朝刊）でもある。そうした現在のアメリカを理解する上で、ウエストはデュボイスを理解することが不可欠とさえ言うのである。

デュボイスはアメリカの人種差別や格差を生みだす資本主義的なアメリカニズムの側面を批判し、西洋中心の膨大な知の体系に挑んだ。そして社会主義を評価したゆえに、アメリカの主流社会から疎外され、最晩年はアメリカを追われるようにガーナのアクラに移住した。そしてデュボイスを招いたガーナ独立の父であるクワメ・ンクルマの依頼もあり、長年、デッボイスが構想を温めてきた百科事典 『アフリカーナ』（*Africana*）の編纂に取り組んだ。アフリカやアフリカ系の人びとの歴史や文化を正当に評価する百科事典の編纂の必要性、重要性を二人とも実感していた。西洋あるいは白人中心主義を批判し続けてきたデュボイスにとり、その百科事典編纂は未完のまま終わったが、その作業は人生の最晩年において象徴的なものでもあった。まさに最後までアフリカやアフリカ系の視座から「精神の脱植民地化」（Decolonizing the Mind）、「学界の脱植民地化」（Decolonizing the Academy）を索め続けたのである。

デュボイスにとり「知は力なり」（Knowledge is power）であったが、それだけでは不十分で、「知は力でなければならない」（Knowledge should be power）であったのではないか。さらには、何かと排他的な現代においては、「知識は人を結び付ける力であり、互いを排除するものであってはならない」（Knowledge should be power to unite us, not to exclude one another）でなければならないであろう。デュボイスの代表作ともされ、日本語を始め多くの言語に訳され、今もなお黒人論の「古典」として読み継がれる『黒人の魂』に、そうしたメッセージを読み取ることが出来る。近年のブラック・ライブズ・マター（Black Lives Matter）に見られるように、人種差別が依然として喫緊の社会問題としてあるなか、さらには人種問題をはじめ、政治・経済・情報などの面において格差や偏りが広がる現在の「グローバリズム」世界において、20 世紀初頭に刊行され、「20 世紀の問題はカラー・ライン」という予言的メッセージや「二重意識論」を含んだ『黒人の魂』は、今もなお、人種問題や社会格差、「マイノリティの問題はマジョリティの問題でもある」といった課題を考える有益性ある書物である。

先述したように、デュボイスは追想の冒頭でこう記している。「わたしの叫びを聞け、おお、神なる読者よ、どうか、この私の書物が、世界の荒野に死産することのないようにして下さらんことを」――デュボイスの祈りとも言えるこの声は、今なお私たちの耳に響き続けている。

【注】

1）本稿は 3 部作であり、前々号の古川哲史「W・E・B・デュボイス『黒人の魂―エッセイとスケッチ』（1903 年）――その現代的意義を索めて（序章から第 6 章）」、『アメリカス研究』、第 23 号、2018 年、41－62 ページ、ならびに、前号の「W・E・B・デュボイス『黒人の魂―エッセイとスケッチ』（1903 年）――その現代的意義を索めて（第 7 章から第 10 章）」、『アメリカ

ス研究』、第 25 号、2020 年、23－41 ページ、に続くものである。本稿の原書に関しては、筆者所蔵の W. E. B. Du Bois, *The Souls of Black Folk: Essays and Sketches*, Chicago: A.C. McClurg, 1903. (3 版［刷］、1903 年 8 月 1 日刊、総 ix+265 ページ）を使用し、適宜、W. E. B. Du Bois, *The Souls of Black Folk,* New York: The Blue Heron Press, 1953. (Jubilee Edition、以下、ジュビリー版）および W. E. B. Du Bois, *The Souls of Black Folk,* 1903. Eds. Henry Louis Gates Jr. and Terri Hume Oliver, New York and London: W.W. Norton and Company, 1999. (A Norton Critical Edition、以下、ノートン版)、W. E. B. Du Bois, *The Souls of Black Folk,* 1903. Ed. Henry Louis Gates Jr., Oxford and New York: Oxford University Press, 2007 (The Oxford Du Bois、以下、オックスフォード版）、W. E. B. Du Bois, *The Souls of Black Folk: Essays and Sketches,* 1903. Ed. Shawn Leigh Alexander, Amherst and Boston: UMass Amherst Libraries and University of Massachusetts Press, 2018 （以下、マサチューセッツ版）などの版を参照した。

なお、現在、学界や教育現場で最も使用されていると思われるノートン版には「新版」がある。ゲイツによる新たな Preface が付され、本稿で主に参照した「旧版」にある Preface は Introduction として変更されている。そのほか、細かい誤記などの修正があり、装丁も変わっている。しかしながら、「新版」には「第 2 刷」や「第 2 版」という明示はなく、発行年も 1999 年のままで ISBN も同じである。書誌学的に問題があろうし、なによりアカデミックにやや「不誠実」ではなかろうか。

本書の日本語訳書である W・E・B・デュボア［ママ］（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、未来社、1965 年、2006 年（新装復刊版）および W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫)、1992 年（1965 年の未来社版の改訳書）からも多くの教示を得た。訳者の表示のないものはすべて拙訳である。引用部分には、現在の基準で見れば「差別的表現」と思われる用語も出て来るが、当時の時代状況や社会状況の反映であり、学術的見地から原書に従って訳したことを御了解頂きたい。

2）古川哲史「W・E・B・デュボイス『黒人の魂―エッセイとスケッチ』(1903 年）―その現代的意義を索めて（序章から第 6 章)」、『アメリカス研究』、第 23 号、2018 年、41－62 ページ。

なお、前稿の注 12 で「1903 年刊の初版や 1953 年刊の 50 周年記念版であるジュビリー版には Of が付されている」と記し、該当のページの写真（図 4）も付した。ただし、2019 年 8 月にマサチューセッツ大学アムハースト校の「W・E・B・デュボイス図書館」と名付けられた大学中央図書館の特別コレクション所蔵の初版本（初刷、1903 年 4 月 18 日刊行）の現物を見たところ、その版には Of が付されていないことを確認した。

3）前稿で言及したように、本書は複雑な構造をもつが、第 1 章から教育を論じる第 6 章、南部の農民生活に焦点を当てた第 7 章から第 9 章、黒人の精神世界を掘り下げた第 10 章から第 1 章に分けられることが多い。一方で、イギリスの社会学者のポール・ギルロイは、批評家の多くは本書が 3 つの部分に分けていると述べ、第 1 章から第 3 章は歴史的、第 4 章から第 9 章は社会学的な章で、第 10 章から第 14 章までは芸術や宗教、文化といった様々な要素が、伝記、自伝、フィクションなどを通して考察されていると指摘している。(Paul Gilroy, *The Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness*, London and New York: Verso, 1993, p. 125.)

本稿は紙幅の関係もあり、第 7 章から第 10 章を扱う。なお、『黒人の魂』における序想、第 5 章、第 11 章から追想までは本書のための書下ろしである。この点にも注意を払う必要があろう。本書の区分については、前号、前々号で言及した里内論考も参照のこと。いずれにせよ、

ステプトが言うように、本書は単なる文章の寄せ集めの書ではなく、巧みに編成(orchestrated)されたものである。(Robert B. Stepto, *From Behind the Vail: A Study of Afro-American Narrative*, Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1979, p.52.) 2nd ed (1991)

4) Robert B. Stepto, *From Behind the Vail: A Study of Afro-American Narrative*, Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1979, p.91. 2nd ed (1991) 本書はその後、1991 年に第 2 版が刊行された。

5) 古川博巳・古川哲史『日本人とアフリカ系アメリカ人――日米関係史におけるその諸相』、明石書店、2004 年、古川哲史「W・E・B・デュボイスの生涯と時代――日本訪問（1936 年）に関わる試論」、『大谷大学研究年報』、第 69 集（2017 年）、1－45 ページ、古川哲史「日本における W・E・B・デュボイス紹介／研究概観――デュボイス著作の翻訳篇」、『黒人研究』（黒人研究学会）、第 88 号、2019 年、126－129 ページ、古川哲史「日本における W・E・B・デュボイス紹介／研究概観――デュボイス紹介／研究篇（1920 年代から 60 年代まで）」、『黒人研究』（黒人研究学会）、第 89 号、2020 年、155－158 ページ。

6) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、284 ページ。

7) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、288－289 ページ。

8) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、290 ページ。

9) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、291 ページ。

10) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、292 ページ。

11) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、294 ページ。

12) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、294 ページ。

13) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、295 ページ。

14) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、298 ページ。

15) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、299－300 ページ。

16) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、302 ページ。

17) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、309 ページ。

18) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、295 ページ。

19) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、315 ページ。

20) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、316 ページ。
21) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、320 ページ。
22) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、329 ページ。
23) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、331 ページ。
24) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、335 ページ。
25) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、335 ページ。
26) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、335 ページ。
27) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、342 ページ。
28) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、345 ページ。
29) 古川博巳・古川哲史『日本人とアフリカ系アメリカ人――日米関係史におけるその諸相』、明石書店、2004 年。
30) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、361 ページ。
31) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、366 ページ。
32) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、366 ページ。
33) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、366 ページ。
34) W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波書店（岩波文庫）、1992 年、366 ページ。
35) CornelWest, *Black Prophetic Fire: In Dialogue with and Edited by Christa Buschendolf*, Boston: Boston Beacon Press, 2014, p. 42.

【付属資料３】（日本語訳書）

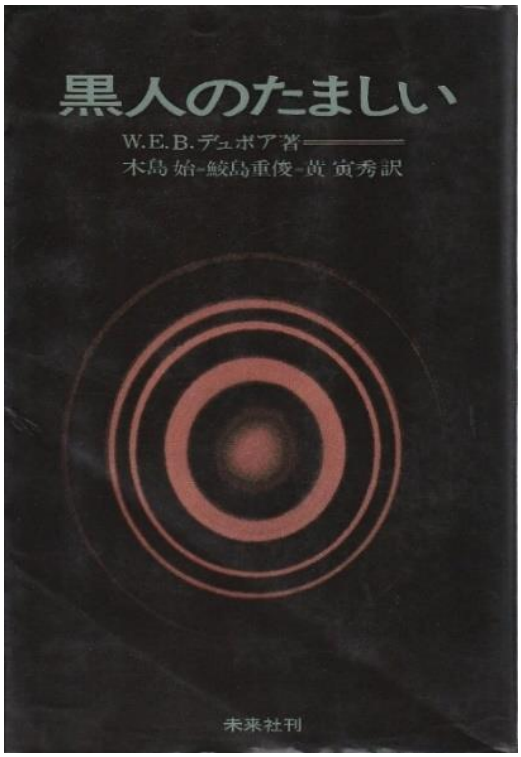

図１：W・E・B・デュボア［ママ］（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）
『黒人のたましい』、未来社、1965 年。（初版）

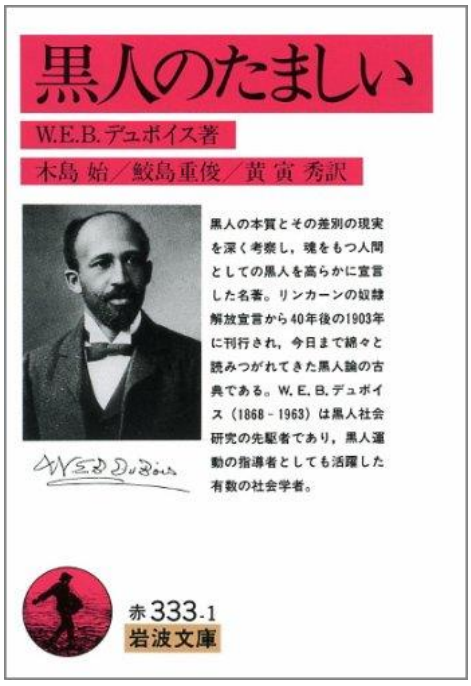

図２：W・E・B・デュボイス（木島始・鮫島重俊・重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』、岩波文庫、1992 年。